



人・間・人 (Ⅱ) 南海部 覚悟

【カンファレンス②】

自動ドアが開いて、白衣の若い女性スタッフが入ってきた。

「先生、準備が出来ました、オペレーションルームへお越してください。」

「有難う、すぐ行く。」

「ムースのくせして内部構造を持ってるようだ、ここにある大型の閉鎖型MRIで、解析してみようと思う。君も立ち会うか？」

「遠慮ときます、どうも昔から実験は苦手で・・・。」

ノートパソコンの電源を落とすと、画面を閉じて脇に抱えた。

「ところで先生、さっきの成分構成比は？」

「——人体のそれと同様ってことですわ。」

黒いムースのガラス容器を持ち上げながら、女性スタッフが呟いた。

「人体・・・？」

「つまり証言した3人は、その時、人体そのものに包まれていた、抱かれていた・・・とも言える、化学的にはね。」

「時間があるなら、ここで少し待っててくれないか、久し振りに一杯どうだ・・・30分も掛からないと思うから。」

そういいながら、女性スタッフと共に慌しく部屋を出て行った。

15分後だった、部屋の外を何人かがバタバタ走り回る音がする。

「逃げられた！捕まえろ！」大勢のスタッフが走りながら叫んでいる。

バイオアラートのフラッシュが点滅し、自動再生の警報がアナウンスされた。

悲鳴の混ざる喧騒の中に、さっきの研究員の声が聴き取れた。

「常温超流動・常温超伝導——なんじゃ、こりゃ！」

ラボに響き渡る大声だった。



【ハワイ】

超高層リゾートホテルに宿泊した経験はありますか？

貧乏旅行者にとっては、身の程を知らない話ですが、ホノルルのベネトン・ハワイアン・ブリッジに4泊した経験があります。——それも都合2回計8泊。

家族3人見事に時差ボケで、チェックインまでの時間をホテルのコートでフラフラしながら過ごしていると、一人だけ元気なかみさんが、上空を指差して何か言っています。

「ほら、あのホテル——なんか変じゃない？」

正面のスペクトルタワーは、このホテルのシンボルで昔から有名ですが、かみさんが指差しているのは当時建設中のリアカタワーの外壁です。

「あれ、手の形じゃない……ぼんやりと解りにくいけど。」

眠気眼に薄目を向けると、ほぼ完成したベージュの外壁に、うっすらと巨大な手のひらが見て取れます。

「最初から、そのつもりでデザインしているのかしら？ だったらお洒落よねえ——。」

「そんな筈ないだろ……手のひらのデザインなんて聞いたことないよ、光線の具合や塗装の濃淡でそう見えるんだ、日本じゃないんだからジロジロ見て注意されたら、説明できないだろ。」

建築士を生業とする立場上、家族に対しても、不確実な判断はできません。

フロントでチェックインを済ませる時刻になると、陽が西に傾き、タワーの外壁も亜熱帯の夕日を浴びて真赤に輝いてきました。

「やっぱり、光線の具合ね——今は何も見えないわ。」

いくら高級リゾートといっても、そこはハワイ・・・温泉や大浴場はありません。

然るに“日本のおとうさん”の行動パターンは相変わらず、部屋に入るなり風呂ということになります。

浅くて長いバスタブに、顔をしかめながらお湯の蛇口をひねります――。

「何だこれは！」――おもわず大声を上げてしまいました。

水圧が低くて、バスタブに湯をはるのに時間がかかるのは、よくあることで我慢できるとしても、湯に浸かりながらホノルルの夜景を見ようと、せっかく楽しみにしていた浴室の窓ガラスに、こともあろうにべたべた巨大な手形が踊っています。――外側から付着しているらしく、シャワーで流しても一向に落ちません。

腹立たしくて、フロントに連絡して日本語の話せるスタッフに来てもらいました。

「窓の汚れを落としてくれ――。」

「申し訳ありません、屋上から清掃用のゴンドラを降ろさなければなりませんので、すぐには・・・。」

「だったら、部屋を替えてくれ――。」

「まことに申し訳ありません、本日は満室で・・・。」

「大体、誰が残した手形なんだ？」

「当ホテルの、作業員だと思いますが・・・。」

「縦横30cmの馬鹿でかい手をした作業員が何処にいるんだ！ イエティ（雪男）でも雇ってるのかこのホテル！」

ハワイにイエティはいないが、30cmの手のひらを持った作業員なら、案外いるかも知れないということで、その場は収まりました。

レストランでディナーを楽しみ、部屋に帰って寛ぐと、忘れていた時差ボケがぶり返し、3人ともそのまま寢床に就いた、その深夜のことです――。

足首を何かに掴まれた痛みで目が覚めました。

いきなり強い力でベッドから引っ張り落とされ、床を引き摺られて、窓際の家具の角にいやというほど股間を打ち付けられました――。

得体の知れぬ気味悪さと、強い恐怖心が全身を駆け抜けました。股間の痛さに耐えかねて悲鳴を上げて、相手は構わず引っ張り続けます。

だんだん意識が薄れるその刹那、掴まれた足首が僅かに緩んだ瞬間、なんとか振り払って立ち上がり、部屋中を飛び跳ねました。

異常に気づいてかみさんがベッドから身を起こします。

「――明かりを点ける！」

ベッドサイドスタンドの明かりに透かして見ると、僅かに開いたテラス窓の隙間から、外の闇が長く伸び、先端が人の手のひらの形になって、再び私の足首を掴もうと狙っています。

「――こいつかあ！」

言うが早いか逆に相手の手首を掴むと、体を回転させて腕を捻じる、あのプロレス技に倣って一気に締め上げます。

8回転ほど回ったところで――ボキ！バキ！と大きな音をたてて闇の手が引きちぎれました・・・・・・・・。

さっきと同じ日本人スタッフを前にして――。

「窓の手形の犯人はこいつだ、君やホテルに責任はない、さっきは酷いことを言った、申し訳ない。」

「お詫びに、この闇の手を提供する、好きに使って欲しい。」

「オプションツアーで明日の朝が早い、我々はまた寝ることにする・・・真夜中に有り難う。」

「いいえ、仕事ですから・・・・・・・・。」

闇の手を両手で抱えたホテルスタッフは、ポカンとした顔で部屋を出て行きました。



ホノルルの朝は、乾いた山風で夜が明けます。

昨日かみさんが指差したホテルの壁も、爽やかな朝日を一面に浴びて、手の形が一層鮮やかです。

——ホノルル空港からビッグアイランド（ハワイ島）を目指します。

9・11以降、ドメスティックエアラインの、セキュリティチェックが殊更厳しくなったのに閉口しながら、黒砂海岸

・溶岩ロード・キュラウエア噴火口・マカデミアナツツのプランテーションと、ハワイ島お決まりのコースを順に廻り、家族3人大いに満足して——夜遅くホテルに帰ってきました。

フロントでキーを受け取り部屋の前まで来ると、驚いたことに半分開いたドアの両側に、銃を構えた兵士が二人怖い顔で警備をしています。

オドオド中を覗き込むと、昨夜の日本語スタッフが出てきて——。

「——お客さん、お帰りをお待ちしていました。」

「どうしたんだ？この兵隊さんは——。」

「この部屋は、今当局の管理下にあります……昨日の件で。」

「昨日の件って——あの闇の手のことかあ？」

「そうです、気味が悪いから今朝警察に提出したんです、そしたら——。」

「当たり前だ、つまらん物をバカ正直に届けるからだ。それで我々はどうなるんだ、3人とも疲れて帰ってきてるんだ……。」

「スペクトル・タワーに替わりの部屋を用意しています、お荷物もそちらに移しました。何か残ってるといけませんから、一応中をチェックして下さい。」



スペクトルタワーの部屋は、高層階にあって今までの部屋と比べると、格段にゴージャスです。

「いい部屋が、空いてんじゃない・・・・・・・・。」

爽やかな海風が部屋を吹き抜け、かみさんも子供も嬉々と楽しんでいます。

ダイヤモンドヘッドのシルエットが、遙か先に輝いて・・・・・・・・

。憧れのワイキキビーチの夜景に見とれていると、乾いたノックの音が・・・・・・・・。

「じゃ、ご主人があれに腕や手というイメージを持たれたのは、浴室の窓にあった大きな手形のせいですね？」

「それだけじゃありませんー。」

横からかみさんが口を挟みます。

「このホテルの一番新しいタワー、その外壁にもっと大きな手のひらがあるんです、陽の当たり方によって、見えたり見えなかったりするんですが・・・・・・・・。」

米政府の科学官僚だと紹介されたスーツ姿の東洋人は、多少ウンザリした顔でメモを取ります。淀みなく日本語を操り、鋭い視線がいかにも有能そうです。

「大体お話は伺いました、おかげさまで色々参考になりますーところでご主人、あれは一体何だと考えておられますか？」

「股間の痛さに囚われて、細かく見なかったので分かりませんが、やっぱり闇の手じゃないですか？今何処に置いて・・・・・・・・。」

「ハワイ大学の研究施設の特異なチャンバーの中に保存しています。」

「ーどんな様子です、生きていますか？」

「生物ではないと考えていますが・・・・・・・・通常は、チャンバー全体に広がっています、観測窓から覗くと一面の闇なんです、ちょっとショックを加えるとー。」

「加えると？」

「一瞬で、ご主人の言われる腕の形に変形します。ある意味、電子や陽子といった素粒子の挙動に似たところがあって……。」

「量子収縮ですか？」

「よくご存知で——。とにかく厄介なのは、入ってくる光を殆ど吸収し、自らも光らないことです、電磁波を使った装置では観測のしようがない……。」

「ねじ切ったときに、骨の折れるような音がしましたから、内部構造もちゃんとあると思いますが……。」

「いまカリフォルニアから別の装置を取り寄せています、そのうち正体も分かるでしょう。それと、これはお願いなんです、あれの正体が分かるまで、このことはくれぐれも内密に願いたい——。我々もテロ対策という理由でさっきの部屋だけでなく、フロア全体を管理下に置いていますので……。」

「勿論です、私たちも旅行先で、メディアに追い掛け回されるのは迷惑です。」

「ご協力有難うございました、よいご旅行を……。」

米国で初めて受けた事情聴取は、こうして終わりました。



「とーさん大変だ！」

早朝のワイキキビーチで、かみさんと泳いでいた息子が、大慌てで部屋に帰ってきました。

「ゆうべ、前にいた部屋の建物で大乱闘があったらしい——あの闇の手がうじゃうじゃ出てきて兵隊さんと戦った、銃声がして怪我人も出てるってみんな大騒ぎしてるよ！」

「母さんどうした！」

「みんなにくっついて、様子見に行ってる。」

まもなくかみさんも帰ってきて、「——外は兵隊でいっぱいよ、安全が確認されるまで外に出ないよう言われたわ。」

「怪我人出たって——また股間潰されたのか？」

「なにバカ言ってるのよ——フロントの話じゃテロかもしれないって、TVクルーも来てるみたい。」

「なるほど・・・いいか、闇の手のこと何も話しちゃいかんぞ、知らんぷりしてるよ——。」屋外の喧騒が、高層階の部屋まで届くようになり、瀟洒なつくりのバルコニーに出て、前にいた部屋の建物（ダイナマイトヘッドタワー）を見下ろしました。

兵士が取り囲んだホテルの窓から、なにやら真っ黒い影のようなものが伸び出てきて、逃げ惑う人々を追いかけ始めます。

悲鳴に重なって、連射の銃声が——。

「自動小銃撃ち始めた——早くなかに入って！」

正面のリアカタワーの外壁が、今日も朝日を反射して金色に輝き——それに見とれたかみさんが、バルコニーに立ち尽くします。

「——何してる、跳弾に当たったらどうするんだ！」

引き寄せようと手を伸ばしたその瞬間——。

大きな塊が、二人の脇を掠めバルコニーの床に飛び跳ねました。

見ると巨大な金属のボルトです。

「ハイテンションボルトだ！やつら、工事躯体に取り付きやがった、摩擦接合が破断するぞ！」

リアカタワーを振り返ると、ほぼ完成した外壁のカーテンウォールが、所々捲れ落ち、躯体の鉄骨が露出していました、その根元にはあの闇の手がうじゃうじゃと・・・・・・・・。

鉄骨の梁は大きく撓み、周囲に高力ボルトの雨を撒き散らしています。

「――いかん！倒れる、逃げろ！」

建物はゆっくりと内側に崩壊し、轟音とともに黄灰色の粉塵が辺りを覆います。

人々の五感が、一斉に遮断されました。

・・・・・・・・爆風と振動が収まり、粉塵の中に朝日が晴々と差込んできたのは、それから15分経過した後でした。

常夏のハワイとは思えぬ、モノトーンの世界がそこにありました。



【カンファレンス③】

「何があったんですか？先生。」

「信じられんことだ・・・。」

年長の研究員は言下に動揺を隠せない、代わりに先程の女性スタッフが答えた。

「試験体をガラス容器のまま、チャンバーにセットしてMRIを起動したんです。最初は特に異常無かったんですけど、少ししてガラス容器が細かく振動するのが解りました、みんな“アレ？”って感じで見てましたけど、そのまま続けていると・・・。」

「試験体が、容器のまま浮かび上がったんです。MRIのチャンバーの真ん中で、宙に浮いてクルクル廻っていました。」

もう一人の、若い男性のスタッフが不安そうに続けた。

「よく見ると、黒い試験体がガラス容器のシールから滲み出て、薄い円盤状に拡がりつつあります。誰かがバイオアラートのボタンを押して・・・。」

「それで、試験体は？」

「全員其処から避難した後、MRIのチャンバーの複雑なシールも抜け出て、実験室内に拡がった。実験室はバイオハザードレベル4仕様だから、暫くはもつだろうが長くは無理だ。建物中どこにだって侵入する可能性がある。」

年長の研究者が答えた。

「危険なんですか？」

「一一解らん、3人の証言からすると、それほど心配しなくていいのかも知れん。唯、私の考えが正解だとすると、少々厄介なことになる。」

「一一と言うのは？」

「あの試験体を入れた容器が浮かんだのは、マイスナー効果とピン留め効果のためだ、分野は専門外だが間違いない。」

「超伝導体が、磁力線を排除して浮遊する・・・あれですか？」

「MRIの磁場の中で浮遊したんだ、それも常温で！とんでもない発見だ。」

ラボの喧騒は収まりつつあった。黒いムースの試験体も、ほぼ同量が実験室内で回収された旨の報告があった。

「あれが常温超伝導体だとしても、3人の証言者がその中でクオリアを共有できた理由にはならないと思います。人の体内深く染み込んで来るわけじゃないでしょうから、感覚器官から脳に至る電気信号さえも、外部からはピックアップ出来ないんじゃないですか？」

「話には続きがある。ガラス容器やMRIの複雑なシールを、いとも簡単に透過出来た理由は何だと思っ？・・・これも専門外だか、常温超流動以外に考えられんのだ。」

「超流動体なら、証言者たちの神経索、シナプス、神経細胞の奥深くにまで、浸入してきた筈だ。何しろ、原子1個ほどの隙間さえあれば、自由に染み込めるんだ。」

「つまりあの黒いムースは、人の脳を駆け巡る情報のただ中に、直接充満していた訳だ。」

「・・・・・・・・」

「もうひとつ、気になることがある。」

東の窓が白み始めた、喉の渴きを感じてお互いの顔を見る、疲れた顔に驚いて振り返ると、全員が実験開始から今まで、飲まず喰わずにいた。

「超流動とは、対象物に摩擦や粘りが殆どないってことだ、それがどんな小さな隙間でも浸入してくる・・・鉄骨構造物の主要な接合工法は？」

部屋の隅に佇む、若いスタッフの方を見て尋ねた。

「高力ボルトによる摩擦接合と溶接です・・・。」

「摩擦で持ってる鉄骨接合部に浸入してくるとすると・・・。」

そう言いながら、巨大なドームの鉄骨を見上げる。

「先生、立体トラスは大丈夫です、摩擦接合じゃない・・・。」

「・・・そうか、よかった。」

フラードームを覆う強化ガラスを突き通して、朝の陽光が、目に眩しかった。



【エピローグ】

宇宙の大半を占める、広大な媒質の中を、濃密に情報が行き交っていました。

やがて、情報は相互に干渉しあい融合し、無数の結集点が媒質の中に生成されました。

そして、そこに“意識”が生まれたのです。

意識は、ある思いのもと自らの周りを強靱な膜で囲いました

。

膜の内外で情報の交流が遮断され、一様な媒質の中に存在していた無数の意識に、彼岸を隔てる“間”が生まれたのです。

生命の誕生でした。

察するに、意識の最初の仕事は、自他の隔てを明瞭に生成することでした。

それまで、宇宙は何処まで行っても自分だったのです。

しかし意識は、何故彼岸を隔てる間を求めたのでしょうか？

自立の為でしょうか？自由の為でしょうか？

宇宙の黎明に情報あり。

情報を輔弼して、時間と空間の概念あり。

情報が結集し、意識の生成に至れり。

意識は彼岸を区切り、間を生むことにより、時空の輔弼を超えて、より濃密な作用を期待する。

膜を張り、自他の融合を阻害せしむ。

分け隔てられし、幾多の意識は生命となる。

されど孤独なる生命は、情念として一体融合を希求する。

生命の情念は、時間と空間の輔弼を得て、この世の永い物語となる……………。

…………… 終わり。

人・間・人 (II)

<http://p.booklog.jp/book/75958>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75958>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75958>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ